[Memorabilia]

—Pethau Cofiadwy mewn Astudiaethau Cymreig—

Rhif 6: 水谷　宏「Llan- で始まるカムリの地名：かな表記の問題」

カムリの地名でもっとも多いのが、Llan- で始まる地名である。カムリの地名が次第に英語化されていき、あるいはカムライグ語の綴りを残しつつも英語式の発音が次第に定着する傾向にあった時代に、カムライグ語の姿を残そうとの努力の一つとして、カムリ大学に委員会が設置され、地名の綴り字の標準化を目指して刊行された ***Rhestr o Enwau Lleoedd***「地名辞典」(1975) には、カムリ全域の約 7,800 の地名が収録されている。その内の 7 %に近い 531 の地名が、この Llan- で始まっている。実際にカムリの国を旅行してみると、毎日、どこかで、「Llan- で始まる地名」に出会う。

さて、この Llan- の発音は、国際音声記号 IPA を用いれば、**[ɬan-]** と表記される。英語にも日本語にも存在しない発音の仕方であり、従って、かな表記に際しては、問題が生じる。英語式の発音でも、英語の‘l’の発音を代用して、

しばしば [lan-] と発音されることが多いようである。英語経由で日本語化されると、当然、「ラン-」とかな表記されてしまう。表現の自由、表記の自由、という建前からするならば、それも致し方ないとも思われる。

他方、IPA で **[ɬan-]** と表記された場合の、**[ɬ]** の記号の意味は、「無声、歯茎、側音、摩擦」という４つの調音的特徴を表している。声帯の状態は、「開いた」状態であり、従って、無声子音の一つである。英語の ‘l’ の発音に見られるような有声音の特徴は、決して存在しない。調音の位置は、英語の ‘l’ と同様に、舌の先、舌の前方部分が、上の歯茎にしっかりと付いているので、「歯茎音」と呼ばれる。カムライグ語の **[ɬ]** の子音が、英語の ‘l’ の子音と共有している調音上の特徴は、この「歯茎音」の特徴だけである。「側音」と呼ばれる「舌の側面」を呼気が流出する調音特徴も、英語の場合は「両側」bilateral であり、「舌の両方の側面」を通って呼気が流出しているのに対して、カムライグ語の **[ɬ]** 子音の調音では、呼気は、「舌の、左右いずれか一方の側面」を通過しているのである。従って、英語の「両側音」**[l]** では、しばしば「流音」と印象的呼称で呼ばれるように、滑らかな有声音が発せられるのだが、カムライグ語の「単側音」**[ɬ]** の調音では、かなり強い「摩擦音」が発せられるのである。

このような調音的特徴に基づくならば、カムライグ語の **[ɬ]** 子音を日本語のカタカナを用いて表記する場合、「ら行」は不適切であり、「さ行」の方がカムライグ語の原音に近いことになる。例えば、**Llangollen [ɬanˈgɒɬɛn]** は、「ランゴレン」では英語の発音には限りなく近いようだが、カムライグ語の原音からはかなり遠い発音になり、不適切である。「サンゴセン」と表記すれば、原音にかなり近い発音となる。

因みに、カムライグ語の **[ɬ]** 子音を、IPA によらない発音表記の一つの方法として、‘hl’ や ‘lh’ などが用いられることがあるが、いずれも、音そのものは IPA で表記されている **[ɬ]** を表していて、決して「フル」とか「ルフ」というような発音実態を表すものではない。IPA が専門的であって、一般読者には馴染みがないので、普通のアルファベットを用いて ‘hlan’ や ‘lhan’ と書き表しているだけのことであり、そのように表記されているものをかな表記する場合も「サン」の表記が適切である。かの有名な植物学者・地理学者・考古学者・言語学者であるエドワード・スイドの人名も、Edward Lhuyd と綴られるが、まさか、「ルフイド」とかな書きすることはできない。

研究紹介 *Rhif 1* Deborah Fisher (2005) ***The Princesses of Wales,*** Cardiff: University of Wales Press　　藤沢　邦子

「プリンス・オヴ・ウェールズ」The Prince of Wales についての著書・評論・記事を目にする機会は多いが、「プリンセス・オヴ・ウェールズ」The Princess of Wales に関するものは少なく、特にその存在を歴史や社会という背景の中で考えた本は皆無であった。洋の東西を問わず、女性が一個人としてでなく「なにがしの母、娘、妻、あるいは姉妹」として生きた時代には、王族といえども正史の陰にいた女性についての信頼できる文献があまり残っていないこともその一因であろうか。

日本では「プリンセス・オヴ・ウェールズ」と言えば、故ダイアナ妃（離婚後は、定冠詞のない 'Princess of Wales'）に代表される「英国皇太子妃」のことと思う人が多い。しかし、本書の著者 Deborah Fisher は、ウェールズ人の視点をもって、より多様な「プリンセス・オヴ・ウェールズ」について紹介する。すなわち、エドワード王に征服される前のウェールズ人プリンセスである、**Angharad** アングハーラード（c.1080-1162）、**Nest** ネスト（c.1080-1115）、**Christin** クリスティン(12 世紀)、**Gwenllian** グェンシアン（c.1037-1136）、もう一人のグェンシアン（1282-1337）などから筆を起し、ウェールズ人君主にイングランド王家やノルマン貴族から嫁いできた **Joan** ジョーン（c.1195-1237）、**Izabella de Braose** イザベラ（13 世紀）、**Eleanor de Montfort** エレナー（d.1282）に触れ、さらにオワイン・グリンドゥールの妻 **Margaret Hanmer** マーガレット・ハンマー（c.1370-c.1420）についても言及する。いずれも史料が少ないので残念ながら短い記述だが、彼女たちが紹介された意味は大きい。

現在の定義では、プリンセス・オヴ・ウェールズとは 1301 年以後にウェールズ君主領（Principality）を継承した皇太子の配偶者のことである。この「正式の」皇太子妃が 700 年後の今日までわずか 9 人しかいないという事実は、英国史の興味深い一面を示している。同じ 700 年間に皇太子は 21 人いたが、病気や

暗殺により早世したり、皇太子時代に結婚しなかったりで、配偶者を得なかった人が多いのだ（人数についてはプリンス・プリンセスともに異説もある）。またすべての国王が皇太子を経て王位についたわけではなく、摂政に助けられる少年王もいた。既婚の後順位の王位継承権者が、皇太子の急死・譲位・廃位といった事情で王となった例もあり、その妻は皇太子妃を経ることなく、王妃に登ったのである。国王に女児しか生まれなかった場合には、皇太子は空位のまま、第一王女（Princess Royal）が王位を継承した。

本書における「正式の」プリンセス・オヴ・ウェールズは **Joan of Kent (1325-1385)**、**Ann Neville (1456-1485)**、**Katherine of Aragon (1485-1536)**、**Caroline of Ansbach (1683-1737)**、**Augusta of Saxe-Gotha (1719-1772)**、**Caroline of Brunswick (1768-1821)**、**Alexandra of Denmark (1844-1925)**、**Mary of Tech (1867-1953)**、そして **Diana Spencer (1961-1997)** の９人である。4人が英国生まれ、3人がドイツ生まれ、デンマークとスペイン生まれが一人ずつであった。著者はこれらのプリンセス・オヴ・ウェールズの生涯を略述し、その役割や存在感や臣民との関係だけでなく、それぞれの夫や子どもや義父母（すなわち国王・王妃—時に女王・王婿殿下）との関係にも、女性ならではの視点で言及する。非ウェールズ人である「プリンセス・オヴ・ウェールズ」達はその称号やウェールズをどう捉えていたのか、逆にウェールズ人はプリンス・オヴ・ウェールズ夫妻をどう捉えてきたのか、なども伺い知ることができる。「プリンセス・オヴ・ウェールズ」という称号についての法律はなく、慣習と諸般の事情を考慮してバッキンガム宮殿がその授受を決定してきた。現皇太子チャールズの妻カミラは、「皇太子妃」ではなく「コーンウォール公夫人」である。さて、将来はどうなるのであろう。

著者 **Deborah Fisher** は **1955** 年生まれ、オックスフォード大学で **Classics/Modern Languages** 修士号を取得。個人的に歴史や考古学の勉強を続け、現在はカウブリッジ博物館の学芸員のかたわら、フリーランス作家として活動している。これまでに ***Who's Who in Welsh History***、 ***A Gower Story*** などの著書があり、雑誌などへの寄稿も行なっている。**2006** 年秋にはウェールズ大学出版局の委嘱による ***Princes of Wales*** が出版される予定である。グラモーガンに夫と子どもたちと在住。

原著は **150** 頁ほどのポケット・ガイド版だが、英国史を女性の視点とウェールズ人の心情を交えて見ている面白さがあり、一気に読ませてくれる。日本語版の拙訳『プリンセス・オヴ・ウェールズのすべて』（仮題）が大阪創元社から出版される予定であるが、それには日本人読者向きに、年表、系図、写真、紋章の図版などが加えられる。

研究紹介 Rhif 2 Jane Gifford (1994) *The Celtic Wisdom of Trees, Mysteries, Magic, and Medicine,* London: Godsfield Press.

黒田 滋

表題にある通り、本書は、ヨーロッパの祖先ケルトの智恵として、その神秘・魔法・癒しについて紹介し、個々の樹木の持つ文化的・医学的価値について論じている。そして、紀元前後のブリテン島に侵入したローマ人たちの驚きについて、“そこに住むケルト人には政治的中心もなく、支配者も存在していなかった事”や、“ケルト人は「祖先崇拝」と「死後の世の存在」という精神生活の基盤を持つている事”など、ローマ人にとっても信仰生活には共通性を感じたと記述もしている。また、ケルトの自然と調和した生活や、自然界の創造物の背後に存在する霊についても言及している。当時英国には鬱蒼とした森が広がっていて、避難場所、エネルギー、食べ物、さらには薬の元になったものの恵みなど大切な存在であった。そうしたケルト的な知識を詩の形で表現した伝承や、アイルランドのオラーヴ、ウェールズのドルイド等に、象徴と連想に謎を解き明かす鍵を求め、オガム文字についても、樹木や草木の名称との関連を指摘している。

「ケルトの木のアルファベット」と呼ばれる最古のオガム文字は、すべての文字が木の名前と結び付けられ、最初の文字Bは、Bethとしてシラカバの木に由来するという様に綴られている。アルファベットは20の文字（5つの母音と15の子音）から成り立ち、20の文字には其々に象徴的な智恵が隠されているとしている（本会の機関誌「日本カムライグ研究」*Bwletin* 第3巻第1号－2007年5月発行に記載予定の別稿「Walesの森林再生に向けて」を参照）。また、ケルトの木は13ヶ月で成り立っていて、特定の木との関連を示すが、詩人ドルイドになるための12年の修行、「色のオガム」や「島のオガム」など、150にもなるのアルファベットについても述べている。「オガム」という名称は、「雄弁を司る神、大陽の顔を持つオグマ」に由来すると言われているが、古代ケルト人が木に与えた意味と活用法や、木々が人類や生態系に対して持っている貢献について指摘している。カムリの国の自然保護について考える場合、極めて示唆に富む情報を提供してくれる研究である。

我々人類は古代から豊かな自然の恵みを多く授かってきた。ケルト祖先の知恵には今なお学ぶ所が多くある。私たちはこの神秘に溢れた祖先の知恵を、彼等が育みそだてた環境と共に後世に残していくことが大切であると思う。

「第5回例会」プログラムについて